

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第三十一回）

わか うら

「若の浦」 〔大和から紀伊へ〕

若の浦に 潮満ち来れば 湊かたを

あしべ

無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡

たづ

る

作者…山部赤人やまべのあかひと（巻六一九一九）

（解説）若の浦に潮が満ちて来て、干潟がなくなるので、
岸辺の葦の生えている辺りを目指して、鶴が鳴きながら
渡ってゆく。

・この歌は題詞によると神亀元年（七二四）に聖武天皇が
紀伊国きよこくへ行幸ぎょうこうされた折にお供をしていた山部赤人が詠
んだ歌である。

・当時の「若の浦」の今の名称は「和歌の浦」と表記する。

この名称地は和歌山県北部にある和歌山市の南西部に
位置する景勝地の総称をいう。古くからの風光明媚な地
で平成二十三年（二〇一一）に国の名勝に指定され、さ

らに平成二十九年(二〇一七)四月には「絶景の宝庫 和歌の浦」として日本遺産に指定されている。

(参考文献) 澤瀉久考著「万葉集注釈」・日本古典文学大系等

(写生地) 和歌の浦に遷座する和歌の三神の一つとされる

「玉津島神社」前から前面に和歌の浦に架かる紀州藩徳

川家が嘉永四年(一八五二)に架橋した。アーチ型石橋

「不老橋」と対岸の山の中腹に西国三十三所第二番札

所・紀三井寺のある「名草山(標高二二九メートル)」等

の風景を描く。(池田杏花)

